

大構造改革の焦点はどこにあるか第9号(2002年06月26日)

第9回「ブローカー」(他人計算)型社会システムから「ディーラー」(自己計算)型社会システムへの転換

その2

鰐の口は何故開き続けるのか...歳入(現実、鰐の下顎)と歳出(理想、鰐の上顎)のギャップは何故解消できないのか...ブローカー型他人責任社会システムのツケは大きい

<目次>

1. 公益軸をベースに自己責任ディーラー型の機能で結んで創り上げたアメリカの証券市場インフラメカニズムの特色...私益を生かしながら最大公益出力をあげる原発型市場メカニズム

(別添 図1 アメリカのザ・マーケットメカニズム...公益軸・投資循環システムと風の紐で結ばれて空を飛ぶディーラー型の証券・金融・資本市場システム)

2. アメリカ型証券市場経済用語を使って作りあげた日本の証券・金融・資本市場経済メカニズムが嵌りこんだ陥穽...植物型インフラメカニズムでは推進も制御もできない日本型の証券・金融・資本市場メカニズム

(別添 図2 アメリカ型証券・金融・資本市場用語を使って作りあげた日本のバザール型証券・金融・資本市場システム)

3. 国民経済システム全体を狂わせたブローカー型証券・金融・資本市場システムと財政の分裂と崩壊...推進・制御メカニズムの欠落と楽観、悲観 片道情報だけ煽るタテ軸内ブローカー型頭脳集団主導社会がはまりこむブラックホール

(別添 図3 日本型証券・金融・資本市場と財政の分裂と崩壊)

(別添 図4 夢と現実を結ぶ「公益軸」「市場規制」「参加者ディーラー責任」欠落のまま歳入と歳出が分裂し鰐の口が閉じられなくなった日本)

前回（第8回）において「ブローカー」から「ディーラー」型社会システムへの転換というタイトルでストーリーを考えている間に「ブローカー」と「ディーラー」とすべきなのか、「ブローカー」から「ディーラー」へとすべきなのかと迷いはじめた。

一応第8回では「ブローカー」と「ディーラー」へという形で述べてみたが依然として「ブローカー」と「ディーラー」の関係についてはっきりとした定見を持ってないのが本音である。

それは「べき」と考えるのか、結果的に「なる」のかの違いである。今回はこうした迷いの中で、はっきりとした目的意識を持ってアメリカが創りあげてきた狩猟民族特有の厳しい適者生存社会の中で育かれた自己責任、ディーラー型の証券・金融・資本市場メカニズムを農耕民族型の日本の社会の中で、どのように受けとめてきたかについて今一度振り返ってみることにしたいのである。

結果的に見る限り占領政策の延長線上で導入されたアメリカ型の市場経済システムを日本はそれなりにうまく受け入れてきたことが現在の繁栄をもたらした反面、その反動として受け入れてきた証券市場メカニズムの副作用によって国全体が悩まされることになったのは確かである。

問題は、原発の臨界事故の危険性を知りながら起こしてしまった副作用としての事故なのか、知らなかった事故なのか、或いは知っていてもどうにもならなかったことなのかによって今後の対応策が変わってくるものと思われる。

こうした意味もあって今一度アメリカ型の証券・金融・資本市場のメカニズムを日本がどのようにして受けとめてきたかについて、その目的、機能、制度面からの喰い違いを検証してみることにしたいのである。

1. 公益軸をベースに自己責任ディーラー機能で結んで創り上げたアメリカの証券・金融・資本市場インフラメカニズムの特色・・・私益を生かしながら最大公益出力をあげて宇宙を飛ぶ原発ロケット型証券・金融・資本市場システム

(1) 皆で創り上げたロケット作りの合意・公益概念の確立

アメリカの証券・金融・資本市場のメカニズムについては何十回にもわたって説明してきた。

しかし何回説明しても最後にゆきつくところは、この「公益」という言葉の意味と、その

実態的な機能について十分に理解したうえで説明できないのが現状である。

日本のように土地をベースに単一民族で暮らしている社会の中で、あらためてこの「公益」という考え方をつきつめようと思って考えてみても今一つ実感としてよく分からないのが本音である。

それ程、緑の自然の中で平和に暮らしている民族にとって理解し難いのがこの人工的に創り上げたとする「公益」という考え方であり、この考え方にもとづいてロケットを打ち上げようとする社会システムの作りである。

この公益の考え方については前々回第7回において説明したように、アメリカの市場経済法の中で具体的に述べられている。

それはアメリカの証券取引所法(1934年)第2条において、護るべき国民的公益は・・・「企業活動」・「徴税力」・「国の信用」の3つであるとし、さらに1975年には「証券・ファンドの安全保障」つまり市場経済のエネルギー源となるマーケットのメカニズムで作られる「証券・ファンド」も保護活用すべき「公益」と考えているのである。

こうした具体的な形で公益が論じられてきている背景には、自由・独立という建国の精神をうけ参加者それぞれが自らの欲望を生かすために市場経済メカニズムという人工的なメカニズムを作りあげ、それによって一国の経済全体を発展させるという大前提があってのことだと思われる。

問題はこの欲望(私益)を満たすために証券市場という特別のマーケットメカニズムを活用しようとした時、強者・悪者の私益によって弱者が支配され騙され結果的にロケットが爆発したり失速してしまっただけでマーケットが成り立たなくなってしまうことを大恐慌の経験によって学んだのである。

その結果、私益欲望発電機をうまく回転させるためには皆で、その中心軸となるべき公益理念を確立しなければ本物の出力が得られないことを知ったのである。

原発のウランと制御棒の関係と同じである。

この公益という軸が信認されてこそ、投資家もベンチャーも仲介人も皆でマーケットに集まって公益目的とする「総出力」を増やし参加した貢献度に応じて分け前をもらうシステムが成り立っているのである。

この考え方は「投資家」「預金者」保護に重点をおいた公平・分配・流通ベースの日本型

の証券・金融・資本市場の考え方とは基本的に異なっているのである。

(2) 私益を生かし乍ら公益を確立する秘策・・・「公益軸」中心に設計されたロケットの仕組み

その1つは公益を軸として創り上げられた「投資循環型のインフラメカニズム」にある。それはまず 総出力という公益目的・・・(企業活動、徴税力、国家信用、証券とアセット)を明らかにしたうえで、その目的を実現するために公益という人工軸を中心にして、燃料・エンジン・マネージメントなどのインフラメカニズムを投資循環機能で結ぶことによってマーケット全体が活動するしくみである。

具体的には・・・ 「証券」(ロケット)、 「ベンチャー企業」(エンジン) 「情報・知識」(頭脳) 「市場仲介技術者」(技)などのロケットエンジン推進機能と、 「会計システム」(メーター)、 「技システム」(責任)というマネージメント機能でロケット全体を制御するシステムと、 「プライスメカニズム」(評価) 「市場メカニズム」(人工心臓)という市場機能を活用して、

「証券金融」、 「金融資産」という燃料を爆発させロケットを噴射し未知の空間に進出し、新しい付加価値を求め全参加者に、その付加価値を分売することによって投資循環が行なわれるというマネー資本主義の基本構造である。

(図1 アメリカのザ・マーケットのメカニズム・・・ ~ 参照)

(3)投資循環機能で私益欲望を結びつける・・・「機能結合」

問題は燃料(リスクキャピタル)、エンジン(ベンチャー)、マネージメント(法、会計、仲介人機能)などのそれぞれの私益欲望を生かしながらメカニズム全体の総出力をあげるためにマーケット全参加者相互間を結びつける機能として考え出されているのが全参加者の持つディーラー責任と投資循環機能の重要性である。

アメリカではこのディーラー型の私益欲望を投資契約と公益理念というタテ、ヨコ2つの基本軸でコントロールしながら結合することによってディーラー型の投資家、企業家、仲介人を中心に物・金一体の市場経済メカニズムを創り上げ夢・ビジョンを実現するためヨコに新しい競争空間を拓け新しい付加価値を求め国民経済の総出力・・・企業活力、徴税力、国家信用力と証券・ファンドが高まるように設計されているのである。

(図1 公益軸と 投資循環機能の組合せ参照)

(4) 表面上の価格・呼値と実態経済を結びつける「規制の紐」の役割り・・・N A S A機能

2. アメリカ型証券市場経済用語を使って作りあげた日本の証券・金融・資本市場経済メカニズムが嵌りこんだ陥穽・・・植物型インフラメカニズムでは推進も制御もできない日本型の証券・金融・資本市場メカニズム

(1) 基本的な軸組の違い・・・ヨコに広がる動物型人工メカ（米）とタテ空間の中の植物型天然メカ（日本）

日本の証券・金融・資本市場メカニズムと、「公益軸」と「投資循環メカニズム」と「規制の紐」によって結合されヨコに広がるアメリカ型の証券・金融・資本市場メカニズムと比較してみると、日本の証券・金融・資本市場のメカニズムに用いられている用語は一見同じように見えても、市場メカニズムの目的もインフラメカニズムの機能も又そのインフラメカニズムの結合の仕方そのものも根本的に異なっていることに驚かされる。（図2参照）

それはアメリカのメカニズムが「人工公益」を軸に動物仲間でお互いにその技を競い合いながらその競争領域をヨコに広げる「投資循環拡大型」のザ・マーケットであるのに対して日本のメカニズムは「天とお上を軸」とする守られたタテ社会の中で仲間うちでとれた作物を農民仲間と交換するだけの朝市バザール型の市場メカニズムなのである。

出力メカニズムはあってもせいぜい自然の水力に頼った村の水車型のもので、流通・交換が中心であって、そのメカニズムにはアメリカのように国家の総出力を増やす目的で打ち上げられる国営ロケットの打ち上げに必要な 公益軸、証券というツールも又 投資循環の機能も マーケットと実物経済とを結ぶ紐も形だけのものしかないのである。

(2) 求めている目的の違いが生むインフラメカニズムの作り方の違い

・・・総出力（企業活力、徴税力、国家信用力、証券、ファンド保護）を目的とするアメリカと、人の平和生活を求めている日本のインフラメカニズム

日本とアメリカでは同じような証券・金融・資本市場経済用語を用いて同じように機能しているように見える市場経済システムの目的が異なっているだけでなく、当然のことながら、その具体的なインフラメカニズムの作り方も基本的に異なっているのである。

同じように使っている証券・金融・資本市場の用語でもその言葉を創り出したアメリカの考え方、組み合わせ方と我々の受けとめ方は文字どおり天と地ほど違っているのである。

まず 「証券」というマーケットの基本になる機能そのものから異なっているのである。

アメリカでは未知の世界から新しい付加価値を生み出すツール・・・例えば、ロケット、人工心臓、原発のような未知の世界に踏みこむために人類が新しく考え出したツールとして考えているのに対して、日本では限られた空間の中で生きる仲間、集団、生活を支える株

式会社のような仲間うちのツールであると考えられている。

「ベンチャー」という機能もロケット、人工心臓、原発など空軍国家をリードする主力エンジンとするとならえ方に対し、日本ではせいぜい農耕民族の補助エンジンである空を飛ぶグライダーとして位置づけられ

「情報、知識」という機能も、宇宙航行には欠かせないサイエンスをベースとするディーラー的自己責任を持つ国家集団の「頭脳」であるのに対し、日本では判断・責任力を持たない断片・知識・用語の翻訳・取り次ぎをする単なるブローカー的な役割りを果たすだけに過ぎないものであり、

「市場経済仲介者」という機能もアメリカではロケットの操縦に欠かせない国家頭脳技術責任者の働きであるのに対して、日本では単なるお金と取引注文の取次ぎをする単純・代理業務にすぎないとされ品質・価格・決済責任を負っていないのである。

中でも「会計」「法」「プライスメカニズム」というロケットの中心軸の機能は、日米間で決定的に異なっている。アメリカでは国営ロケットの宇宙航行を支えるメーター、ナビゲーター、軌道修正装置として市場経済型国民経済のコックピットの基本メカニズムとして捉えている。

そしてそこに求められている「法」regulationとは国家の命運を賭けた市場経済競争に勝つための「国民経済の基本戦闘法」として位置づけられているのである。

日本ではこのアメリカ型の市場経済戦闘責任法と「村のバザールの管理規則」の識別が出来ないまま、タテ軸行政カルテル規制撤廃に合わせて、この「市場経済戦闘責任法」ともいべき「会計」「法」「プライスメカニズム」の管理主権を確立できないことが市場経済無政府状態を招く原因となっているのである。

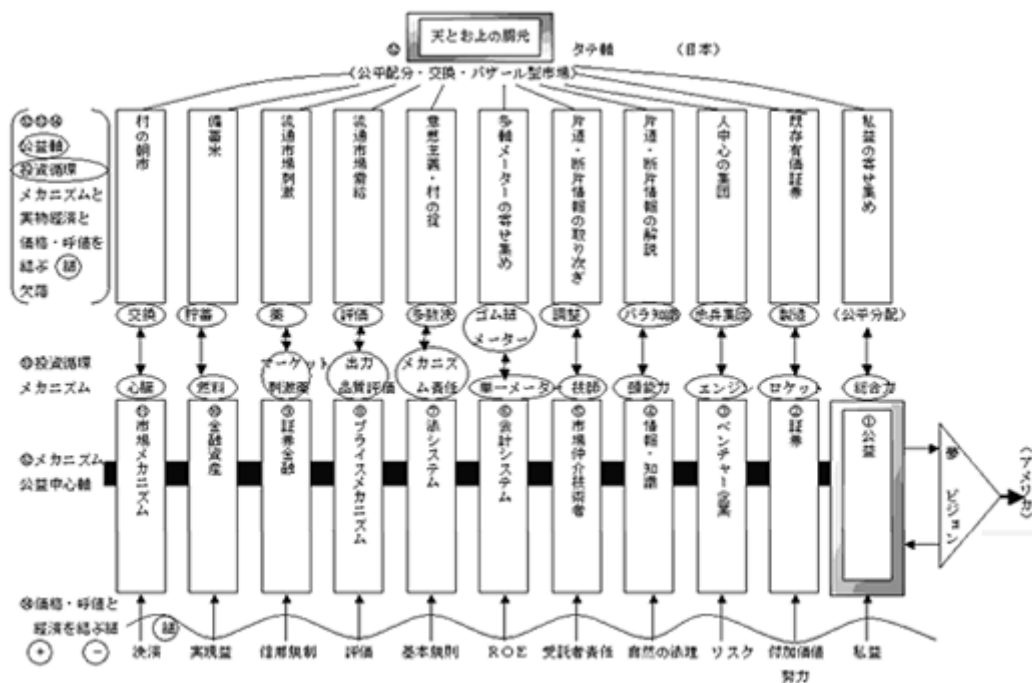
競争促進の為に撤廃すべき「行政規制」と、公正競争を促進するために強化すべき「市場規制」とが混同され無防備のまま証券・金融・資本市場競争空間が開放され現在の惨状を招いているのである。

「証券金融」「金融資産」という機能はロケット、原発、人工心臓を支える基本エネルギー源としての「リスクキャピタル」「種もみ」としてアメリカで捉えているのに対して、日本では不作に備えての備蓄米として捉えられ、これをリスクのとれる種もみに変えるメカニズムそのものがないのである。

全体のメカニズムを支える「市場経済メカニズム」は、アメリカではそれぞれ参加者責任を持つ全員で創り上げたロケット、原発、人工心臓として国民経済を支える重要な財産(asset)であると位置づけているのに対し(1934年法第11条A 1975年改正)日本では村人の生活集団に必要な作物の交換の場であるバザールのメカニズムとし

て捉えており、「品質、価格形成メカニズム」とか「売り」「殺し」「強制決済」といった動物社会に欠かせない市場取引の慣行は、仲間うちでは必要のないものとされ神・天に従って解決すべきものとされているのである。(図2 ~ 参照)

図2 アメリカ型証券市場用語を使って作り上げた日本のバザール型証券・金融・資本市場システム



3. 国民経済システム全体を狂わせたブローカー型証券・金融・資本市場システムと財政の分裂と崩壊

(1) 公益軸、市場規制、参加者ディーラー責任の欠落の中で、無責任ブローカー取次情報に煽られて迷走する日本経済

前述してきたようにアメリカ型の総合出力を高めるために作られた市場経済競争メカニズムが、そのままバザールシステムに形だけ移入された結果、日本では同じように市場経済用語が用いられながら用語本来の機能が根づかないまま国民経済システム全体がバブルに煽られそのあと収縮し迷走を続けている。

前述してきたこの日米間のメカニズムの違いの中で、我々があまり気づかないで過ごしている重要な問題がある。

それは前回第8回において説明した「ブローカー」と「ディーラー」の違いの問題である。

自己の名で他人の計算で取引を取り次ぐ「ブローカー」と自己責任で取引を仕切る「デ

ディーラー」とではそれぞれが作る集団の機能は天と地ほど違ってくる。

本来「ブローカー」だけで循環機能は作れるわけがないのである。それは（図2 アメリカ型証券・金融・資本市場経済用語を使って作りあげた日本のバザール型証券・金融・資本市場システム図）に示す 公益、投資循環メカニズム、規制の紐によって結合されているインフラメカニズム・・・証券、ベンチャー、情報、仲介技術者、会計、技、プライスメカニズム、証券金融、金融資産、市場メカニズム、それぞれのインフラメカニズムの機能の独立性と責任能力の問題である。

アメリカでは、それぞれが独立した会計責任、法責任、受託者責任、価格・品質責任、執行責任を持つ独立した個別のインフラメカニズムとしての責任を果たしながら相互に結合しあうことによって全体の公益を達成しようとするディーラー型参加者間で創り上げている。

残念ながら日本のメカニズムはそれぞれの機能を表現する「用語」はあってもそれぞれ機能を取り仕切る能力も責任も持っていない単なるブローカー取次集団の集まりをマーケットと呼んでいるだけにすぎないのである。

証券・・・の市場メカニズムにいたるまで、その機能それぞれの本来の役割責任が公益目的から明らかにされることなく、それぞれの属している行政区分によって分断・細分化されたタテ軸内の私益のために業務が行なわれるだけであり、この分断された責任のないブローカー的な私益拡大機能を形だけ結んでマーケットと称しているのである。

そしてそのバラバラのインフラメカニズムを束ねる 公益、投資循環メカニズムも規制の紐という全体をコントロールするシステムもないのであるから総出力の求めようがないのである。

アメリカと同じように市場の動きを通して国民経済全体の姿を分析したり、計算したり、責任を求めたりするメカニズムそのものが整っていないのである。

こうしたなかで、日本経済をリードする為政者、知識人、情報伝達者、市場仲介人、行政、市民全体がディーラー責任のない片道、買い（売り）、楽観（悲観）情報を煽り合うだけで中心軸を失ったまま迷走論を繰り返しているのであるから方向が定まらないのは当然なのである。

それは、今まで土地・天・お上という確立されたタテ軸の中で暮らしてきた農耕民族が

空を飛ぶ鳥の真似をして幻の時価という富を求め、空に舞い上がってはみたが市場品質測定機能を備えていないため自分の現在位置すら分からなくて迷走しはじめた鳥の姿に似ている。

自分の現在位置が分からない限り、次の手はうてないのである。

(2) マーケットメカニズムの崩壊が生む歳入、歳出の不符合・・・開いてしまった鰐の口・・・国家信用力の低下

こうしてお上、胴元から全参加者にいたるまで全員が責任を持たないでブローカー体制のまま、市場に参加した結果、まず証券・金融・資本市場メカニズムの接ぎ木部分から崩れはじめとうとう実物経済から一国の財政経済までもが崩壊しはじめているのである。参加者のうち大半のセクションが自らの責任で取り仕切って品質を価格で評価し決済する力を持っていないのであるから巨大な霜柱のような経済システムが崩れはじめるととめようがないのである。

それはまず と 証券ベンチャー力とリスク挑戦意欲の減退から始って、
市場経済競争に必要な頭脳、情報力の退化、
市場経済技術コスト、競争力の低下と企業活力の衰退と、
会計システムの腐敗、
詐欺的行為の横行、
価格品質信用力の低下、
市場の投機化、
金融資産品質の劣化とROE低下・ゼロ金利経済、
投資循環機能の破綻 - そして証券・金融・資本市場経済メカニズムの崩壊へとつながっている。

そしてその結果、徴税力が低下し、景気・失業・福祉対策費が増加し不良債権と公的債務が激増し歳入、歳出不符合 とまらない財政赤字 開いてしまう鰐の口 国家信用力の低下へと追いこまれたのである。

この証券・金融・資本市場メカニズムの崩壊から財政崩壊にいたる姿はアメリカ大恐慌後1934年証券取引所法第2条において大恐慌の教訓として示した市場規制を必要とする理由に述べている説明そのものなのである。(第1回 原因解明なくして改革なし 2001.7.28 参照)

こうした現象は人の欲望を「投機」という人工的な手段を使ってより大きなエネルギーを引き出そうとするアメリカ型の「投機」活用資本主義の持つ宿命であり、「投機」によって左右される「価格」を人為的に支配したいという魔力にとりつかれてしまう人間の業でもある。

問題はこの「投機」暴発を制御するために必要な制御装置を持っているかどうかにかかっている。

悲しいことに村の朝市・物の交換・バザールしか知らなかった日本の本丸は、欲望をむき出しにして競う異質者を束ね強制的に決済するという制御装置を備えた価格変動「投機」活用型の証券・金融・資本市場システムを受け入れる準備をする間もなくザ・マーケットに接合させられてしまったのである。

(図4 夢と現実を結ぶ「公益」「市場規制」「ディーラー責任」欠落のまま歳入、歳出が分裂し鰐の口が閉じられなくなった日本参照)

(3) 潜在的蓄積力と付加価値創造力との戦いの時代

この姿は第2次大戦開戦時において、日本が貯えた軍事蓄積力(軍艦、航空機、燃料、軍人の数)をベースに開戦計画をたてて戦ったのに対して、連合国側はエネルギー補給力と参加者の機能連合力に重点をおいて戦争が行われた姿と似ている。それは「証券」と付加価値機能を使って獲物を捉える動物社会の発想と、市場を生活手段として捉える農耕民族との違いである。

第2次大戦も今日も日本は第一ラウンドは蓄積爆発力を生かして勝つことが出来たが、第二ラウンドはインベストメントバンクという空軍型の市場メカニズムを使って持続的に付加価値創造力を供給できるようになったアメリカのグローバルスタンダードに振りまわされることになっているのである。

こうした中で、潜在的蓄積エネルギーを持つ日本と、付加価値創造力を武器とするアメリカと、実物経済力を持つヨーロッパ、アジアなどとの間でいよいよ第3ラウンドの戦いがはじまろうとしているのである。

その鍵は国家として市場経済をどのようにして受け入れるかという基本姿勢にかかっている。

自ら基本軸となるインフラメカニズムの設計を忝り場あたりの接ぎ木システムに頼っていたのでは生きてゆけないことがはっきりしてきたのである。

図3 日本型 証券、金融、資本市場の分裂と崩壊

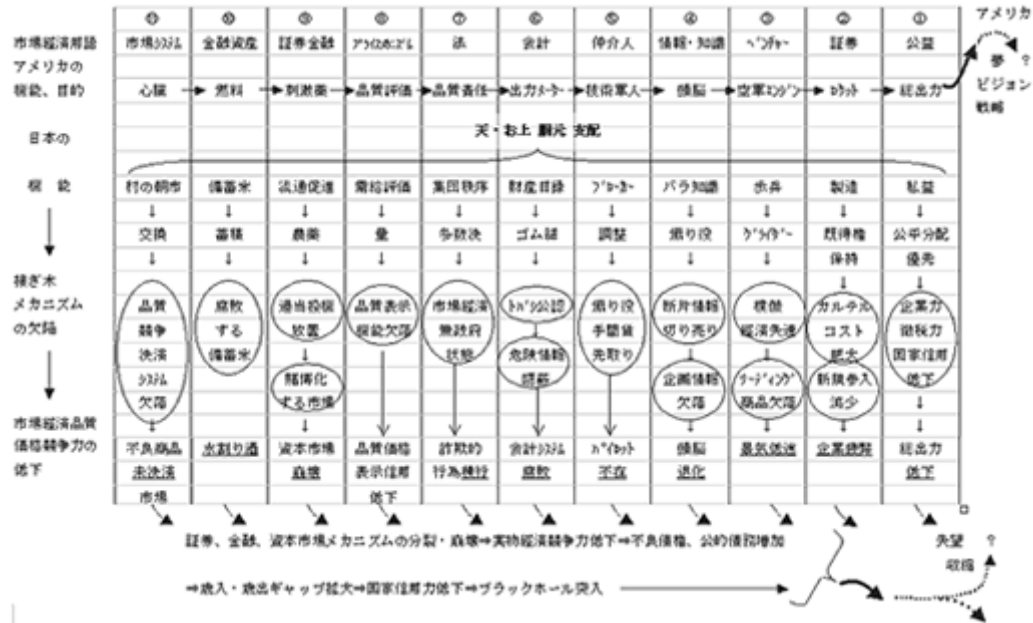


図4 夢と現実を結ぶ「公益軸」「市場規制」「参加者ディーラー責任」欠落のまま、歳入、歳出が分裂、罅の口が閉じられなくなった日本

